特集3

# 城崎温泉の街づくり―「街全体が一つの宿」―

三木屋10代目当主　片岡　大介

１３００年の歴史を持つ城崎温泉は外湯文化を核として独自の発展を遂げてきた温泉地です。私はこの地で「三木屋」という旅館を営むと同時に、地域の魅力を発信し未来を形づくる取り組みに携わっています。城崎の歴史と文化、そして現在進めているまちづくりの姿をご紹介したいと思います。

## 北但大震災と復興の歴史

今からちょうど１００年前の１９２５年に発生した北但大震災は、城崎の温泉街を壊滅的に破壊しました。木造建築が密集していた温泉街はほぼ倒壊し、町民の約８％が犠牲になるなど被害は甚大でした。しかしながら、当時の町長西村佐兵衛氏のリーダーシップのもと「共存共栄」を合言葉に城崎温泉は奇跡の復興を遂げます。

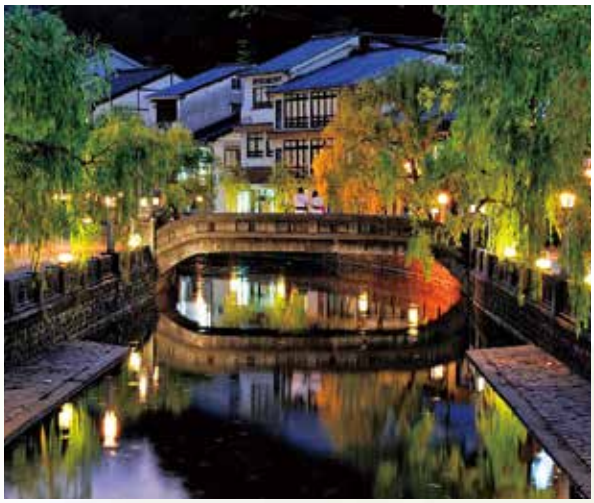
地蔵湯前より焼けあとを望む

当時、兵庫県からは神戸に倣って洋風の街としての復興の提案がありましたが、城崎温泉の出した答えは「木造の温泉街に戻す」というものでした。しかしただ元に戻すのではありません。町民が無償で土地を提供しあった上で道路・川の拡幅を行い、また火事の際の延焼を防ぐために、外湯などの公共建物にはコンクリート建築を街区ごとに配するなど、東京から専門家を招聘し入念に都市計画を行った上での「木造の温泉街」としての復興でした。現在の城崎温泉の代表的な風景である、街の中心を流れる大谿川（おおたにがわ）に太鼓橋が掛かり両側の柳並木に木造三階建てが並ぶ、という景観は１００年前の復興から今なお続いています。

柳並木

## 外湯めぐりと「共存共栄」

城崎温泉の大きな特徴は、七つの外湯（現在1か所休館中）を巡る文化です。宿泊客は自らの宿のお風呂にとどまらず、浴衣に下駄を鳴らしながら外湯を巡ります。その姿は街を彩り、地域全体ににぎわいをもたらします。外湯は単なる入浴施設ではなく、地域を回遊する仕組みそのものであり、商店や飲食店といった地域経済を支える基盤でもあり



大谿川

ます。

実は城崎温泉には「宿の内湯は小さくなくてはならない」というルールがあります。宿の定員に応じて浴槽の大きさが制限されているのです。昭和30年から続くこの「共存共栄」のルールのおかげで昔ながらの温泉街の姿が今なお続いています。こうした文化が長く受け継がれいく中で、「街全体でお客様を迎える」という城崎独自のホスピタリティの精神が根付いてきたのです。

外湯めぐり

## 城崎案内人、本と温泉、そして若手経営者の挑戦

受け継がれてきた温泉街の歴史や魅力をより深く知っていただきたいという気持ちから、私は「城崎案内人」という観光ガイドの一員として活動を行っています。「城崎案内人」にはお寺の住職から蕎麦屋の店主まで様々な職業の人間がおり、年齢も30代～70代と幅広く、皆、街に対して熱い思いを持っています。

「共存共栄」の精神が根付いている城崎温泉では、日頃から皆が積極的にまちづくりに関わります。その中でも特に、若手の意見を尊重し意思決定を若手に任せていく文化があるのが特徴的で、年齢、職種を問わず積極的な意見を交わし合っています。

そのような中で生まれた活動にNPO法人「本と温泉」があります。これは短編「城の崎にて」で知られる志賀直哉の来訪100周年を記念して、現代における「文学の街」としてもう一度城崎温泉を発信しようという試みで、城崎温泉に来ないと買えない「地産地読」の本を作って販売しています。オンライン販売全盛の時代に、本が欲しければ買いに来い、という非常に尖ったコンセプトですが、それを評価していただける万城目学さん、湊かなえさんなどの有名作家さんの協力のおかげで2013年の設立から12年間で計5冊発表し、発行部数は約8万部を超えています。

本と温泉「城崎裁判」

また、デジタル技術を活用して地域全体の予約状況など観光データを収集・分析し、経営の効率化や観光客の体験向上を図る取り組み「豊岡観光DX」や、人手不足の時代に対応するために、各旅館、商店の垣根を越えて同期の仲間を作り新入社員の定着率を上げていく「城崎温泉合同入社式・合同研修会」など、「街全体が一軒の宿」をコンセプトに課題解決に向けた取り組みを若手発信で行っています。

## これからの城崎温泉が目指す姿

人口減少や社会の変化が進む中で、これからの温泉地も持続可能な未来を見据えたまちづくりが求められています。北但大震災からちょうど100年を迎えた2025年5月23日に、まちの次世代を担う若手が主体となり、地域課題の解決を見据え次の100年にむけたビジョンを発信するシンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは兵庫県知事・豊岡市長をお招きし、下記の3つのテーマで提言を行いました。

①外湯中心主義／桃島バイパスの開通を見据えたまちの新たなグランドデザイン
②まちの未来を創る子どもの教育
③安心・安全なまちづくり／防災・減災・そして医療

今後、世界中からの観光客が益々増加していくことが予想される中で、温泉街への自動車の流入を制限し、安心して歩いてめぐる温泉地を促進しながら、それを支える住民生活のための教育・医療の在り方についても具体的に提案を行うというもので、住民主体で課題解決のために具体的に動いていることを、知事・市長から非常に高く評価いただきました。

100年後も城崎温泉が世界中からのお客様で賑わい、そこに住まう人達が地域に誇りを持ちながら幸せに暮らせるよう、今後も「共存共栄」を変わらぬ合言葉としてまちづくりに邁進していきたいと思います。